「高校野球強化プロジェクトの３年間を振り返って バイオメカニクス的サポート担当」

スポーツ医・科学的トレーニング専門員委員会委員
富山大学　教　授　　堀田　朋基
富山大学　助教授　　鳥海　清司

２０００年とやま国体の翌年から始まった高校野球の特別強化プロジェクトも今年度で３年目をむかえた。我々バイオメカニクス担当班は、まず実際の試合で選手の動作がどのように行われているのか、現状を把握することを第一に考えて甲子園大会や北信越大会に出向き選手のフォームをビデオに記録した。初年度は投手の動作に焦点を当て高速度ビデオ等を用いてフォームのチェックを行った。分析の結果、投球動作の時間やフォームに違いがあることがわかった。また甲子園大会で他県の投手と比較した際に本県の投手の問題点もある程度わかった。

２年目の昨年度は、打撃動作に焦点を当てた。幸い春の甲子園大会で決勝戦をビデオに記録することができたので本県代表の選手達と比較することができ、トップレベルとの違いが見えてきた。また分析結果はチームにフィードバックしてトレーニングに役立ててもらっている。この際に中学のジュニアレベルからの系統的な指導の重要性が指摘された。また甲子園での得点傾向や北信越での投手の投球速度をスピードガンでチェックすることなどで甲子園で勝ち上がっていく際の具体的な目標が少しづつではあるが見えてきたように思われる。

３年目の今年度は投手が球種を投げ分ける際のフォームの変化を調べ、苦手とするボールを投げる際には投球フォームも微妙に変化すること等が明らかにできた。また打撃動作については、甲子園大会でバックスクリーンから超望遠カメラで打者のフォームを正面から撮影し種々の球種に対する対応動作を探ろうとした。この点は現在分析中である。

バイオメカニクス的サポート担当班は当初手探り状態であったが、数々の大会で撮影を重ねることで基礎データが蓄積されてきたように思う。また県高野連の総会でもプロジェクトの結果報告をする機会が与えられ、少しずつではあるが動作の重要性が認識されつつあると思う。現場の指導者の方々にも我々のプロジェクトに理解を示してくださる方々から貴重なご意見をいただいている。今後は現場との連携をさらに密にしながら、実践に役立つ情報を提供していきたいと考えている。